

日本農民詩史

中卷(三)

松永

松永伍一著

日本農民詩史

中卷(三)

法政大学
出版局

著者略歴

詩人、1930年4月福岡県に生る。八女高校卒業後、ただちに村の中学教師となり、八年間勤務、1957年4月上京、文筆生活に入る。詩論および民俗学的評論などを多く発表。

〔著書〕

「草の城壁」（母音社刊）、「くまそ唄」（国文社刊）などの詩集のほか「陽気な農民たち」（未来社刊）、「日本の子守唄」（紀伊国屋書店刊）、「望郷の詩」「日本のナショナリズム」「底辺の美学」（大和書房刊）、「日本人の愛の唄」（新興出版社刊）、「荘厳なる詩祭」（徳間書店刊）など十数冊がある。

現住所 東京都練馬区上石神井1—355



日本農民詩史 中巻 (2)

1969年2月25日	初版第1刷発行	定価 2,000円
1970年11月20日	第2刷発行	

著者 松 永 伍 一

発行者 相 島 敏 夫

東京都港区南麻布2—8—4

発行所 法政大学出版局

電話・東京(453)0717/振替・東京95814番

三和印刷／鈴木製本

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします。

1095-94003-7710

目次

口 絵(資料写真)

第五編 アナキズムの土壌 その二

第一章 心情派の存在理由 六五五

詩的アナキズム 中野重治の批判 『銅鑼』の農民詩と坂本遼の「お鶴の死と俺」

猪狩満直の「仲間よおれ達は戦ってゐる」 『学校』への発展とアンソロジー『学校詩集』刊

行のエピソード 土俗性にたつ北方詩人たち 『北緯五十度』の創刊まで 『弾道』

との論争にみせた心情派の心意気 雑誌発行の経緯と真壁仁の問題提起 アンソロジー

『北緯五十度詩集』の構成 千葉宣一の研究 『犀』と長崎浩と「無題」および「年寄り」

(註) 『北緯五十度』総目次 『犀』目次

第二章 猪狩満直のたたかい 六八七

詩集『移住民』の序と井上俊夫の批判 猪狩の詩の時期的分類 「告白」と名門猪狩家

クリスチャンへの道 北海道移民となる 『移住民』の詩群 更科源蔵や渡辺茂ら

との出会い 『農勢調査』の詩群 帰郷と再渡道と再帰郷 『秋の通信』以後の心境

信州の工事場への出稼ぎと発病

(註) 猪狩満直の略歴

第三章 更科源蔵の詩原点七〇九

猪狩との友情 原野に対する更科の自虐的ナルシズム 父の入植 『抒情詩』で

の入選作「栄光の秋」 鳥居省三の評価 詩集『種薯』の刊行 「チャチャはこう話

して呉れた」と「吹雪」 コタンへの愛慕と「熊の話」 無政府共産党事件 高村光

太郎の「彼は語る」 コタン人形づくり・結婚・妻の死 札幌への脱出 妻中島葉

那子の性格と詩 「出稼ぎの話」および「馬鈴薯階級の詩」

(註) 更科源蔵の略歴 『野良に叫ぶ』の出生を祝する歌

第四章 真壁 仁の世界七二九

祖父から受けたもの 『街の百姓』の自序にみられる芸術観 先師からの影響 『街

の百姓』の構成 青春期の環境とたたかい 農事報告の手紙 立場と主張 「街

の百姓」連作と「蚕の詩」連作 『日本浪漫派』への参加 「村山農学校」と「冷害地帯」

土着的詩の方法論 『青猪の歌』がなぜ第一詩集か

(註) 真壁 仁の略歴と著作

第五章 東北の野良着七五九

『無肥料地帯』の出現と叫び 力強い雑記 加藤精宏の「泥田の中で」と「馬の詩」

『藁』と改題 加藤吉治の開墾生活 「吹雪」と「山の女たち」と「ザサマの話」

小穴部落の大火 大田富美樹の「より合い」 高橋小一郎の「余情」 無着成恭の批

判 鈴木健太郎の『古風な村』の「馬」と「父の夢」

(註) 『無肥料地帯』目次

第六章 加藤愛夫と原野の詩人七九二

父と北海道移民生活 詩壇とのつながり 「土民生活」と「夏の夜」 戦争と詩

『群声』の泉玲児 『石狩』の小田正夫 「霜害警鐘」と「雲」と「小屋から町の靴屋への便り」 宮沢賢治研究

(註) 加藤愛夫の略歴

第七章 細川 基の視座八〇九

ダダリスト詩人竹村浩との関係 「悪童生誕」の発想と「死滅する村」 雑誌『黒い貌』

から『野良』への変化 「野良の相談所」での仕事 「お寺さま」と「工女」

(註) 細川 基の略歴

第八章 秩父の橋本貞治八三二

第一詩集『涙の日記』とプロレタリア詩創造の願い 質的転換と『農民詩人』への参加

第二詩集『跋の乞食』への発展 「お天道様」と「野良のかへり道」その他 反戦詩

「名誉」を書いた態度

第九章 坂本 遼の抒情八三六

母子相聞の詩集『たんぽぽ』 血の肯定と真壁仁との類似 幼児体験と母 「春」「だ

まってる心と心」 草野心平との出会いとかれの坂本遼観 長編詩「時雨」の美しさ

坂本の農民詩観と祖父の影響 『たんぼぼ』の序文 『学校詩集』への参加

(註) 坂本 遼の略歴

第十章 杉山市五郎・有島盛三・木山捷平 …………… 八五五

杉山市五郎とアナキストたち 詩集をつくった小型印刷機 「トウモロコシの実」と「モ

ロコシモチ」 「月下の細道を」と伊藤和の「高神村事件のときの詩」 有島盛三の存在

「隣の大將」と「おっちゃんとおっかん」 民謡的情景への共感 「笑へない気持を朗ら

かに笑って」から「こんなみじめさで居るもんか」への発展 アナキズムへの共感と伊藤和

讚美 詩集『駄ン馬』の発刊と中村英徳の感想 木山捷平の詩集『野』と『メクラとチ

ンバ』 「オカアの血のにじんだ餅」のベースス 「おしのの腰巻」のユーモア 奥野

健男の木山捷平評 高橋久由の「六助爺」

第十一章 上 政治とその周辺 …………… 八九〇

白鳥省吾の詩集『麗はしき野人』への序 伊東静雄との類似点 大地舎への参加

「秋の唄」「老人の言葉」 肉親の愛と詩作 胡麻政和の不満 「農民詩人協会」の設

立とかれの農民詩観 プロレタリア詩に対する認識 磯茂樹の『くさもち』 「かは

いさうに」「くさもち」「婆さんよ」「かめさんのことば」「濃霧の中で」 岸本加津一「土穀

を破る」と菊岡忠次「五月」と榊井義夫「野っ原は俺のものだ」

(註) 農民詩人協会出版部刊行物一覧 上 政治の略歴

第十二章 開墾者・三野混沌 …………… 九二五

山村暮鳥との交流関係 苦悩者としての出発 詩集『百姓』『開墾者』の刊行 生活

の芸術化をめざして アナキズムへの接近 詩集『或る品評会』にみられる生産者の欲

喜 『この主人は誰なのか解らない』の理想主義 「共力こそが」「自由消費」 草

野心平の評価

第十三章 『日本農民詩集』の刊行……………九三九

青山紅人編『大根詩集』 三嘴三郎「わらべの歌へる」と更科源蔵「炭焼き」 アナ系の

『日本農民詩集』 犬養智の「牛を売ってしもうた」と上野頼三郎の「ハルと手紙」と加藤愛

夫の「北村」など

第六編 土着の旋律

第一章 関東の各地で……………九五七

千葉県の詩運動と『千葉詩集』 鈴木勝の「一細胞」 名雪理輝と山田貞四郎と坂上篤司

三枝幸夫と小原義正と田村栄 神崎豊太郎の「高神の話」 清水房之丞の『霜害警報』の

詩編 『上州詩人』の永田克己の「馬・罌丸」 埼玉の『農民文学』と福島清信の「農村

の夜」 茨城の鈴木正雄の田園詩 渋谷栄一の『真冬』の詩編 「米を売らねばなら

ない」と「ある農村の出来事」 島田芳文『農士思慕』 葉山貞の「歟の錆」 山岡

盛夫と渋谷正司

(註) 清水房之丞の略歴

第二章 東北の詩山脈……………一〇〇一

福島梁取美津妓 海野秋芳の『北の村落』 青森の高木恭造の『まるめろ』と福士幸

次郎の序 地方主義運動の意義 方言詩「生活」「凶作」「吹雪」 岩手の森佐一の
 新人発掘 『春と修羅』との感動的出会い 森の「山村食料記録」 及川均の受難と
 詩集『横田家の鬼』 「提灯さげてゆく花嫁」 鈴木伸治の思想性の強さと弱さ 「凶
 作夏季」 山内透の詩集『山神祭』と「凶作図景」 笹木是克の「馬」 佐伯郁郎の
 役割 及川儀三の「春」

第三章 東海・北陸から

..... 一〇三一

浅井十三郎の「吹雪の中にうたふ」 『北日本詩集』の農民詩 木村政吉の「握り飯」「稲
 刈りに暮れて」ほか 千石喜久の詩集『文明の宣布』と白鳥省吾の序 思想詩の可能性
 ルポ「越中米騒動の発端」と戯曲「越中米騒動」 舟川栄次郎と川口清 愛知の稲葉幸
 志「製麴の春」 吉地昌一の農本主義思想と農民詩

第四章 西日本展望

..... 一〇四七

野長瀬正夫の初期の詩「春蚕」「村童」など 植村諦の村への反逆 大地主西川林之助の
 『古風な鐘音』 「受難の田園」と被害者意識 「裁きの朝」と「野に叫びあり」と奈良地
 方の農民運動との関係 広島細川昊の「片山」 香川の真鍋勝見の転向と農民詩
 詩集『田園の火祭』の特徴 大分の斉藤英俊と詩集『村の夜明』の「農民の歌」 「田鋤」
 と「桑畑で」 沖繩の伊波南哲の「銅鑼の憂鬱」
 (註) 真鍋勝見の略歴

第七編 農民民謡運動

第一章 民謡運動の概況 一〇七九

時代の動きと民謡 百数十種の民謡雑誌 民謡論一覽 安岡黒村の「歌う詩」の提

唱の説得力と矛盾

第二章 犬養 智らの『新興歌謡』の実績 一〇八六

新興歌謡作家同盟の結成まで 同盟の「約束」 鈴木勝の民謡観と前田いさむの主張の

対立 犬養 智の『野良の昼飯』の発禁 弾正のなかでの犬養の心境変化 細川 基の

『棘のある巢』と土田橋夫の批評 鈴木勝の『農民民謡集』と『食へない労働』 佐藤末

治の『万年床』の迫力 杉明一の「貧農の唄」と木坂俊平の「小作の父親がうたってきかす

唄」 国井重二の「喧嘩」と兼田俊夫の「雲」 アンソロジー『新興歌謡選集』（一九三三

年版）の意義

（註）『新興歌謡』総目次

第三章 農村不況下の民謡 一一二三

松村又一の『風と鶴』の世界 故郷はかれの永遠なる虚像 「年貢米」と「あの木」

北見庄三郎の「地主親爺」と渡辺波光の「月夜」 山口狂介の『納屋の隅っこ』 石川善

助の「暗い田舎」 若杉雄三郎の「小作爭議異聞」と高島敏雄の「小作爭議の唄」 古茂

田信男の出現の意味 「枷」と「わたしの夫はいつかへる」 島田芳文の『民謡詩壇』の

人々 藤渕忠一の『労働民謡』の人々 益子一彦の「畦道」 臼井元嗣の『蹄』と

「郷土・苦農編」 伊藤静馬の『らっきょ畑』 志田十三の「稲」十態 『塩汁貝焼』の

緊張感

第一章 心情派の存在理由

「心情派」という呼び方をすることに私も抵抗を感じる。ほかに適当なグループ規定のしかたがありそうだが、という理由によってではなく、こういう曖昧な言葉を冠せた場合、ここに採りあげた詩人たちが、思想的に虚弱で現実との闘争から手をひいて、やや隠遁的志向をもつてうたっていたと誤解されるのを怖れるからである。民衆詩派はともかくデモクラシー思想の高揚期に詩の民主化という役割をはたしたから、いまでは呼称も常識として通るようになっていたが、この「心情派」は、たとえば「現実派」などとおなじく茫漠としているだけでなく、時代の趨勢に対処する詩人の姿勢と存在理由を、直感的にでも定位させてくれない無責任さがある。しかし、読者はすでに気づいているだろうが、アナキズムとマルキシズムの兄弟喧嘩の動きのなかで、第三編に収めた戦闘的・行動的アナキスト詩人の群像が、第四編のおなじく組織的な動きを通じて生き闘ったナップ系の詩人たちと、近親憎悪的な性格をむき出しにしてきた事実をふりかえり、イデオロギーに問題を集約しそうなこれらの対立する詩人たちの外側に、権力を憎み時代の苛酷な波とたたかい、そこに生の全影を投じた詩人たちがいたとすれば、この本の流れのなかでのみ「心情派」という呼称を用いてもよいのではないか。

情操としてのアナキズム——詩的アナキズムと言ってもよいが、右にあげた戦闘的、組織的活動のアクティヴな面を幾らか差引いて、リベラルなそれでいてつねに相互扶助の精神を生活と詩創造の重要な砦としてそれを手

放すまいとした地点で、土着志向の意味をあきらかにその詩人と作品とは示していた。情操としてのアナキズムの気分的なところ、素朴な処女性のような泥くささ、プロレタリア芸術運動に刺激されつつ、そこにナマの形でとびこんでいくことを拒むもの……そういう内側の核は、民衆詩派に対する評価「彼等^{*1}の多くは、あまりにも強い人間的意識、現代人たる自覚のために、芸術家たることを忘れた」（矢野峰人）を突きくずし、「……現代人たる自覚のために、口には芸術家であることを否定しつつも、すぐれた芸術はそういうところから創造さるべきであるとする意志をつよく持っていた」といわしめるものがあつた。ピューリタンのですらあつた。第三編に登場する詩人との交流を充分もち、弾圧もおなじく受け、怒りも叫びも必要としながら、それをごく控え目に内に引きよせる形で、イデオロギーの露出をまず防ぎとめ、ときによっては内的秩序の美を求心的に結晶させようとする傾向を見せた。人間的なものの肯定は、だから非人間的なものの否定に当然つながる。

中野重治が、この派に属する人々に対して「かれらには、貧窮からの逃げ道を求めることの正当な肯定が共通している。かれらには、しばしば、日本の庶民の当時の弱さの反映として、それ自身としての善意の追求が濃くあらわれている。いわば、かれらのところでは、領主風・専制君主風な武者小路実篤の人道主義などとは性質の異なった人道主義がまもられている。そこに却って、一種のあきらめ、一種のあてどない憎悪、結局は自分自身に帰ってくる悲哀がある。武者小路風な人道主義が残酷で楽天的なのをたいして、この詩人たちの人道主義は温良で悲観的である。貧しきどちの睦みあい^{*2}がそこに見られる。同時にまた、この窮乏と無権利とを、人間のあいだの戦いによって解決するよりは、自然にたいする態度——自然からの災害を受動的に受けとる態度が共通してみられる」とみたのは卓見であり、およそそのような「貧しきどちの睦みあい」の温かさを生の極限的肯定になぎとめようとする悲しいまでの善意があつた。これらの人々は、『銅鑼』から『学校』へと発展し、または『北

緯五十度』や姉妹誌『犀』に結節して、ともに善意の血路をそこに見出していたのであるが、この活動期（昭和三年～十年）は、詩壇においても『詩と詩論』が本格的なヴァンギャルドの芸術運動を開始した時期でもあった。アンドレ・ブルトン「超現実主義宣言」、アラゴン「スタイル論」、ヴァレリー「純粹詩論」をはじめ、コクトオやエリオットなどの仕事が決つぎばやに紹介され、詩の方法論化の積極的な役目をはたしたこのグループの、モダニストたちは「貧しきどちの睦みあい」などという土俗的な古風な魂を前近代の遺物として拒絶することによって、詩を生み出す緻密な機械たらんとしていた。

「心情派」とは、魂の所在を確かめつつ、古風なにするものぞ、という土着者の糞真面目一点張りでおし通そうとした、流行へのレジスタンスの意味をも含んでいたのだと私は見ている。それゆえに美しく、またそれゆえにかれらは弱さを多く内包してもいた。猪狩満直、更科源蔵、真壁仁、加藤愛夫、坂本遼、三野混沌、木山捷平らは、社会的行動の多面化や組織化に自己をあてがおうとしなかったために、ときにはユートピアへの希求を現実生活の地面に結びつけたり、土の重さに魅せられたり、血縁の奇妙な深い絆に惹かれたり反撥したりする良心の所有者の位置を捨てなかったし、それがまた農民のかなしさの発現を大きく促す力となるのだった。

さて『銅鑼』であるが、この雑誌は草野心平によって中国広東から発行された。大正十四年（一九二五）五月のことである。当時、草野は広東の靈南大学にいたが、そこで三号まで出し、四号は郷里福島県石城郡上小川村から出し、あと一・二の例外を除いて東京から、傾向の多少似た詩人たちを集めて出しつづけられた。ここに農民詩を書いたことのある詩人をひろえば、坂本遼、宮沢賢治、山村暮鳥、森佐一（莊巳池）、三野混沌、猪狩満直ぐらいで、坂本を除けば、他は農民詩を発表する場を別にもっていたし、宮沢賢治のごとく発表しないで書くことの必要のみをみずからに課している詩人もいた。

この雑誌の空気はアナキズムを濃密に含んでおり、はじめからではないが、第八号あたりから思想的傾向がはっきり加わってくることによって、同人の赤木健介や原理充雄らのちにマルキシズムに進む詩人たちの発言が問題となる。より自由に、気ままに、野放図に、それでいて衝動的に言葉をたたきつけることを早くから知った草野は、理論などおよそ問題にせぬ青年の一種の俠気のようなものに拠っていたから、そのようなものとしてアナキズムのもつ反抗性を受容することになったであろう。草野は『銅鑼』を思想論争の場にもっていくことで、アナ・ボル論争の厄介な問題をもちこむことを避けようとしていた傾きがある。しかし、かえってそうした反理論的傾斜をとることがアナキストの立場の詩人たちを気分的につなぎとめる効果を發揮したし、のちの青野季吉の論文が出てから『文芸解放』↓『黒色戦線』↓『弾道』とつづく戦闘的な一群の詩人たちの陣地が固められるが、『銅鑼』はそれらと友情のパイプを通しておきながら個人的なベースで生活の哀感をうたう詩人の場を封じない形で、ときとしては相当に強く叫びを発しようとする勢いも見せなくはなかった。だがリベラリズムの臭いは、草野の詩壇への進出とその心の師である高村光太郎との結びつきの緊密さによってヒューマニズムの旗じるしを無意識のうちに掲げることにもなったのである。

坂本遼はすでに詩集『たんぽぽ^{*4}』を出版したし、ほとんど毎号のようにアルカイックな美しい農民詩を書いていた。人情をうたい、自然をうたい、生活のはかなさと生命の大切さをこうまで単純化した手法で、しかも方言を駆使してうたいあげた詩人は他に類例がないが、

「おとっつあんが死んでから

十二年たった

鶴が十二になったんやもん」

と云うて慰められてをったお鶴が
死んでしもうた

はじめて氷が張った夜よるやった
わかれの水をとりて背戸へ出て
桶に張った薄い氷をざくとわって
水を汲んだ

お鶴はお母んとおらの心の中には
生きとるけんど

夜よるおそうまでおかんの肩をひねる
ちっちゃい手は消えてしもうた
おら六十のおかんを養ふため
働きにいく

お鶴がながい間飼ふた牛は
おらの旅費に売ってしもうた
おかんとおらは牽かれていく牛見て
涙出た

仏になつとるお鶴よ
許してくれよ
おら神戸へいて働くど

という「お鶴の死と俺」(第九号)を見ても、『銅鑼』が包括しているものの一つの極をそこに示しており、土俗の美しさをアナキズムの強調でなしに、人間の情意の底をさりげなくうたって運命の不可避性をそれとなく、強く指さしていることがわかる。坂本についてはあとで一章設けて論ずるが、農民詩人の猪狩満直は、「仲間よおれ達は戦つてゐる」(第十三号)というつぎの詩を発表して、坂本の温かい家族愛・肉親愛とは別の地点に立って、仲間の必要を願わずにはおれなかった。猪狩は家族制度の歪みに対する切烈な反抗をもちそこから脱出した詩人であったから、現実に対処する姿勢も荒けずりではげしかったことを、作品がよくあらわしている。

稻黍^{とうき}めし食つてゐると

モチモチ腹わたがねっからまりそうだ

塩もない

赤貧乏

その上 病氣ときゃがる

俺達の頭を吊したが ってる木ならいくらでもあるさ

だがそんな木を切り倒しては焚火にしてゐる俺達だ

眸のどんな時でも 仲間よ

俺達は俺達のやうな子供のあることを忘れはしないんだ

どんなときでも 仲間よ

俺達は新しい地を継ぐ子供のあることを忘れはしないんだ

飢餓

吹雪

仲間よ 俺達は戦つてゐる

こういう傾向が『銅鑼』にとって決して邪魔にならない。心情の吐露は「目的意識論」とはほとんど無関係に、泥だらけの詩にこうして見られた。竹内てるよといっしょに住んでいた神谷暢の「火——揆に加はった彼の言葉」も同号に掲載され、アナキズムの戦闘性が他の書き手たちを刺激し、土方定一も「エリゼ・ルクリュへのバクーニンの手紙の断片」（ネットラウ）を翻訳し、草野すら「同志『小生』に送る手紙」をつぎのように結ぶという現象を呈した。

「小生ノ

北っ風は北から吹く

来るべきものは必ずくる

生るべきものは必ず生れる

おれたちの信ずるおれたちの社会は必ずくる

おれたちの握手には間違いはない

おれたちの握手は断行を意味する

てのひらとてのひらがめりこむまで

おれたちのてのひらを握りあはう

腕と腕と

そのまんまガッチリ押し進めよう」

草野は「蛙」を書いてきたフォークロア的風格のある詩人であり、一方ではアジアの民族的血盟を内に秘めた浪人的な面をもっていて、詩的衝動がつねに爆発しそうな生をもてあましている感じの壮士でもあった。詩風が求心的でなく遠心的であることが、多くの詩人に影響がきわめて大きく及ぼされている原因だと言ったのは前記の中野であるが、右のような詩が、革命運動との深い連繫がもてなくなっているときに、しかもみずからは行動